

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 3 日現在

機関番号：16102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21730628

研究課題名（和文） ハワイ日系移民の就学前教育に関する史的研究

研究課題名（英文） A Historical Study of the Early Childhood Education for Japanese-American Children in Hawaii

研究代表者

塩路 晶子（SHIOJI AKIKO）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：70314888

研究成果の概要（和文）：

本研究は、19 世紀末から 20 世紀前半のハワイにおける日系移民の子どもたちが受けた就学前教育の保育内容を明らかにすることを目的とした。日系の子どもたちが通っていた幼稚園の中で、ハワイ無償幼稚園協会の幼稚園や、キャッスル幼稚園などの保育内容は、アメリカ進歩主義教育運動に影響下にあり、日本語学校幼稚科の保育は、日本の幼稚園の保育項目に近い保育内容だったことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

This study aimed to clarify the educational contents of early childhood education which Japanese-American Children took in Hawaii from late 19th century to early 20th century. The Educational Contents of Free Kindergarten and Children's Aid Association of Hawaii and Castle Kindergarten were influenced by the American Progressive Educational Movement. And contents of Japanese Language School Kindergarten were close to educational contents of Japanese Kindergarten in those days.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	163,963	49,188	213,151
2010 年度	436,037	130,811	566,848
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	359,999	1,559,999

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：就学前教育、ハワイ、日系移民

1. 研究開始当初の背景

アメリカにおいて就学前教育の発展の歴史は、移民の子どもたちのための教育と密接に関連している。19 世紀前半にフレーベル主義幼稚園がアメリカを席卷した後、無償幼稚園やプレイグラウンド運動、進歩主義教育幼稚園などが各地に広がった。一方でアメリカ

の幼稚園教育が移民の子どもたちを「アメリカ化」する機能を果たしていたことも指摘されるようになってきた。当時アメリカでこのような就学前教育が広がる一方で、ハワイにおいても 19 世紀後半から英語を用いた私立の進歩主義教育幼稚園や無償幼稚園などが設置されていった。

ところで、当時のハワイの就学前児童の約

40%が日系移民の子どもたちであったといわれている。1854年に日系移民がハワイに到着して以来、プランテーションを中心として年々、日本人移民は増え続け、ハワイ社会に日本人・日系人は定住していった。そこで多くの日系人の子どもたちは、公立小学校に通う前に、上記のような進歩主義教育幼稚園等に通っていた。進歩主義教育幼稚園の普及と、日系移民の数の増加の時期は近似していた。またそれらとは別に、日本人・日系人の仏教寺院や教会などが日本語学校系の幼稚園や託児所を設置しており、そこにも多くの日系の子どもが通っていたと考えられる。日系人の子どもたちも6歳以上の学齢期になると、ハワイ併合に伴ってアメリカ合衆国の公教育を受けることが義務づけられたのであるが、学齢期以前に、英語やアメリカ文化、あるいは一世のもっていた日本語や日本文化を身につける上で就学前教育の果たした役割は大きいと思われる。

当時のハワイ日系移民の教育に関する先行研究については、小学校教育や高等教育、日本語学校教育などを中心として行われているが、就学前教育についての研究は管見の限りでは存在せず、その全体像は明らかになっていない。

2. 研究の目的

本研究は19世紀末から20世紀前半のハワイにおける日系移民の子どもたちが受けた就学前教育の保育内容を明らかにするとともに、就学前教育が移民の子どもたちにとってどのような意味をもっていたのか、ということについて解明することを目的としている。

3. 研究の方法

本研究課題は、保育内容の中身に踏み込んだ歴史的な一次資料（当時の保育内容等の実践記録など）を収集し、分析することを主な研究方法とした。

また、当時の幼稚園に通園した経験を持つ日系二世の方々に、幼児期の家庭生活や、幼稚園での保育内容について、インタビューも行った。

4. 研究成果

平成22年度から23年度にかけて、ハワイ大学マノア校・ヒロ校の附属図書館、ハワイ日本文化センター、布哇日系人会館等において、日系移民の就学前教育に関する資料調査を行い、解明できたのは以下の点である。

19世紀末から20世紀前半までのハワイの就学前教育において、日系人の子どもたちが

受けた保育は大きく二種類に分けることができる。

一つは、主にアメリカ本土からやってきた保育者等が設立した英語の幼稚園であり、もう一つは、移民である日本人・日系人が設立した日本語学校の幼稚科である。

(1) ヘンリー・アンド・ドロシー・メモリアル・キャッスル幼稚園とナーサリー・スクールは、デューイから思想的に大きな影響を受けた進歩主義教育幼稚園としてメアリー・キャッスルとその娘ハリエット・キャッスルによって1899年に開設された。アメリカ本土で広がりつつあった進歩主義幼稚園が、遠く離れたハワイ・ホノルルにも普及することとなった。その保育内容については以下の点が明らかになった。

①デューイの思想を受け継ぎ、子どもの興味や生活に身近なものについての主題や教材を中心としたオキュペーションやプロジェクトを展開するものであった。オキュペーションは子どもの知的側面と手が全体的に活動してはじめて有効であるということが指摘されていた。これは単に子どもたちが手を動かして作業をしさえすれば、子どもが何かを身につけたということではなく、知的な働きと手の働きが協働してはじめて学んだということになるのである。また、かつてのオーソドックスな幼稚園において行われていたように指先の動きを中心とした手仕事ではなく、手や腕全体を動かして作業することが大切にされている。そして、教師の役割についても言及されており、教師が何もかもオキュペーションの準備し、お膳立てするのではなく、子どもが自由に発想し作業したり興味を生かしたり出来るような「最小限の」準備をすることこそが、子どもにとって「最大限の」教育的効果をもつ活動になることを指摘している。オキュペーションの例として挙げられていたのが、「ドール・ハウス」の活動である。

②多数の英語を話さない日系人の子どもたち（1920年代には20%程度）のために、保育の中でプロジェクト活動等とおして、英語を理解すること、アメリカ的生活習慣を身につけることなどを教えていた。

③1927年に設立されたキャッスル・ナーサリー・スクールにおいては、親との関わりも重視されていた。母親たちの興味や動機付けを行い、家庭とナーサリー・スクールの協働を密にするために、スクールのディレクターたちは次のような努力をしていた。それは、看護婦や担任教師による電話、家庭訪問、記録（身体検査、予防接種など、親ミーティング、

栄養クラスのお知らせなど)を子どもが家庭に持って帰ったり、欠席者には郵送すること、学校医による診察と相談・アドバイス、ハワイ大学の児童心理学者による検査とアドバイス、個人的なカンファレンスやレポート作成等である。

(2) 19世紀末から20世紀初頭のハワイ無償幼稚園協会 (Free Kindergarten and Children's Aid Association of Hawaii) は、ハリエット・キャッスルによって1894年に設立され、いくつもの幼稚園を指導しハワイの幼児教育をリードしてきた。以下の点が明らかになった。

①日系移民の子どもたちのうち、1927年には約3%程度が無償幼稚園協会の幼稚園に入園していた。また、協会が指導していたマザー・ライス幼稚園では、1920年代から40年代にかけて日系移民の子ども割合は平均82%程度であった。他に、日系幼児が占めていた割合が高い幼稚園としては、パラマ幼稚園、ヌアヌ幼稚園、フォート・ストリート幼稚園、カリヒ幼稚園、ミュリエル幼稚園、リリハ・ストリート幼稚園等が挙げられる。

②ハワイ無償幼稚園協会の幼稚園では、アメリカ進歩主義教育運動に影響を受けた保育の中で、身近な家庭生活の再現遊びやごっこ遊び、創造的に物語を生み出すプロジェクト活動などの遊びを行っていた。それは保育者によって一方的に指導される遊びではなく、子どもから生み出された遊びであった。幼稚園では日系人だけでなく他の人種の子どもたちも一緒に、アメリカ的な遊びや生活習慣、英語に触れていった。また、子どもの衛生や栄養を保つために、母親ミーティングも熱心に行っていた。

③協会の幼稚園では、多数の英語を話さない日系人の子どもたちのために、公立学校への入学を見据えて、生活場面やごっこ遊び、絵本の読み聞かせや話し合いを通して、英語を話すこと、アメリカ的生活習慣を身につけることなどを教えていた。

(3) 20世紀初頭の日本語学校幼稚科については、以下の点が明らかになった。

①日本語学校には、独立系(無宗教)、本願寺や浄土宗など仏教のお寺が開設した学校などの種類があった。幼稚科においては、一日1時間程度の短い時間ではあるが、遊戯や唱歌、手工、話方など、日本の幼稚園の保育項目に近い遊びをしていた。

②1921年7月1日には外国語学校取締法が施

行された。そしてこの取締法に反対する日本語学校が1922年12月28日に試訴の裁判を起こす一方で、非試訴派の日本語学校との対立を生むことになった。そのような中で、1923年1月1日には、日本語学校の学年を短縮する規則が実施され、幼稚科と小学校1年生・2年生は保育・教育を行うことができなくなった。そこで、ホノルル市内では13の日本語学校のうち、パラマ日本語学校、中央学院、東洋学園、カリヒ日本語学校の4校を除く他の日本語学校(フォート学園、カカアコ日語校、布哇女学校、パラマ学園、マキキ日本語学校、モイリリ日本語学校、ワイキキ日本語学校、マノア日本語学校、カIMUMキ日本語学校)は、幼稚科・小学校1年生・2年生のために、英語で保育・教育を行う児童保護園(英語保護園)を開設することにした。

『日布時事』によると、パラマ学園の児童保護園の幼稚科は1時に、1・2年生は2時に開始されている。保育内容は月曜日:手工、お話/火曜日:復習/水曜日:唱歌、遊戯/木曜日:復習/金曜日:唱歌、お話/土曜日:手工、図画/となっており、これらの指導を英語によって行うというものである。つまり、従来幼稚科で行われていた遊戯や唱歌などの保育項目を、日本語ではなく英語で行った。1927年以降、小学部においては教科書をハワイ独自に編集したように、1923年の児童保護園の開設は、幼稚科の保育もハワイの実情に合わせて変化したことを意味するものであろう。1927年には外国語取締法に対する違憲判決が出され日本語学校は従来通り存続できるようになったが、日系移民とその子どもたちに様々な混乱を引き起こしたといえる。

(4)就学前の幼児は家庭で生活する時間が長く、日系一世である親や近隣の人々の日本の生活習慣を保持したコミュニティの中で暮らしていた。当時の移民の日記によると、故郷の日本は遠く離れているが、同郷の日本人同士が近くに住み、支え合い日々の暮らしを送っていた様子がよくわかる。そこには、初衣、鯉のぼり、柏餅など、日本の子育て文化・生活文化そのものを生きようとする人々の姿がある。彼らの生活の中には日本的な子育てが確かに位置づけられている。二世の子どもたちは、ハワイにおいても、日系一世である大人たちの温かいまなざしの中で、日本の生活様式や文化、そして日本語を身につけて育っていったのであろう。そしてそこで身につけたことをベースに、子どもたちはそれぞれ日本語学校幼稚科や無償幼稚園協会の幼稚園に通っていた。

日本語学校幼稚科も、ハワイ無償幼稚園も、その保育内容にはその時代を生きる日系の子どもたちの姿や日系一世の保護者の願い、そし

てアメリカ合衆国の準州としてのハワイ社会の価値・文化などが反映されていたと考えられる。

以上のような成果は、これまで明らかにされていないハワイ日系移民の子どもたちが受けていた就学前教育の一側面を照射するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①塩路晶子、20世紀初頭ハワイにおける日系移民の就学前教育に関する一考察、鳴門教育大学研究紀要、査読無、第27巻、2012、32-44ページ

②塩路晶子、アメリカ進歩主義教育における保育内容に関する一考察—ハワイ・キャッスル幼稚園, ナーサリー・スクールに着目して—、鳴門教育大学研究紀要、査読無、第25巻、2010、51-64ページ

<http://www.naruto-u.ac.jp/repository/metadata/319>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

塩路 晶子 (SHIOJI AKIKO)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：70314888

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし